

未来への伝承

戊辰戦争を生き抜いた十一代兼定の刀

禁門の変・北越戦争を経験し、会津戦争で弾丸鑄造を行った刀匠

現在放映中のNHK大河ドラマ「八重の桜」のヒロイン新島八重(旧姓山本、最初の夫は川崎尚之助)が鶴ヶ城(会津若松市)において、スペンサー銃を手にして戦っていたことをご存知の方も多いことでしょう。この籠城戦で弾丸の鑄造をしていたのが、この刀の制作者で、会津藩のお抱え刀鍛冶である十一代兼定です。また、会津藩預かりであった新撰組の土方歳三の愛用刀が十一代兼定の作であったことも、NHK大河ドラマ「新撰組」で広く知られるようになりました。

文久2(1862)年2月、会津藩主松平容保が幕府の強い要請により京都守護職を引き受けると、兼定も藩命により翌年には上洛し、同年和泉守を受領して十一代兼定を襲名しました。また、元治元(1864)年に長州藩と諸藩浪士が拳兵して松平容保を排除しようとした禁門の変では、御所の警護も務めています。

慶応元(1865)年には会津に帰りますが、藩命により同4(1868)年4月、32歳の時に長岡藩に

(差表銘)「和泉守藤原兼定」(左)
(差裏銘)「慶應四年戊辰閏四月為松宮君於北越觀音寺邑造之」(右)
(土浦市立博物館所蔵)

に大きく変わっていたのです。

降伏開城後は謹慎処分となり、明治2(1869)年に越後国賀茂(新潟県加茂市)に居住して鍛刀を続け、同7(1874)年に

加勢するため、戊辰戦争の一つである北越戦争に参加しました。兼定は弟子を引き連れて参加していることから、かなりの数の刀を制作することが求められていたと思われます。また、差裏銘に「於北越觀音寺邑造之」とあるように觀音寺村(新潟県西蒲原郡弥彦村)で作刀していたことが分かります。「為松宮君」とあるのは、松宮雄二郎のことで、侠客名を觀音寺久左衛門と称し、大前田英五郎や国定忠治とも親交があつて全国的に名の知れた大親分です。觀音寺村は、北陸道が近くを通ることから会津藩領へ入るための要衝の地でもありました。久左衛門は会津藩の要請により博徒兵をまとめ、水戸浪士や会津藩士とともに新政府軍と戦つたのです。(参考：中島欣也著『戊辰任侠録 越後の侠客 觀音寺久左衛門』)

は会津に戻っています。同9(1876)年の廃刀令により刀匠として生計は立てられなくなり、作刀の意欲は捨てきれず、同25(1892)年願いのうえ自作の刀を皇太子殿下(大正天皇)に献納し、同36(1903)年には陸軍東京砲兵工廠に召し出されて、新設の日本刀鍛冶所の鍛刀を命じられました。戊辰戦争後、多くの会津藩士が極めて厳しい境遇に陥つた中で、兼定の事例は八重と同様に稀な存在だったといえるでしょう。しかし、喜びも束の間、兼定は鍛刀受命の2か月後に67歳で急逝してしまいます。

兼定は戦局の悪化にともない觀音寺村から会津に帰藩しますが、新政府軍の侵攻は早く慶応4年8月には鶴ヶ城の籠城戦に備えています。八重の弾丸を作つたかどうかは定かではありませんが、城中では刀でなく弾丸鑄造を命じられました。戦の仕方は既に

本刀は、元幅、先幅ともに広く、大切先となる幕末特有の姿をしています。また、幕末の刀は700gから750g程度で古刀に比べ重いものですが、本刀は968gもあります。土方歳三の愛刀は二尺八寸あつたとの記録がありますので、同様の作柄と仮定してその重さを計算してみると1115gと想像されます。両手でも長時間持ち続けるのには、かなりの腕力が必要と思われる。

兼定は、幕末の重要な出来事に関わりを持ちながら、刀匠としての生涯を貫いたといえるでしょう。この刀は、10月14日(月)まで展示室2で展示しています。(※10月14日(月)は、祝日で開館となります)刀を前にして、幕末動乱の歴史的事件の一端を想像してみたいかがでしょうか。

関市立博物館(0824・2928)